339
163

始

339
163

自習速記術

339-163

自習速記術

大正
1.12.24.
内交

速記文字手本

ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ
イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ		リ
ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル

序

速記術を以つて、懸板に水を流すやうな演説を、すら〳〵と一字も漏らさずに書き取る事が出來たら、何んなに愉快な事でせう。此書は自習用として、分り易く親切に速記術を説明したものでありますから、速記術を覺えたい人は是非御一讀をお勸め申します。

大正元年十二月

編者

自習

速記術

目次

第一　速記の歴史……一
第二　易しくて難しい……三
第三　速記自習の用意……六
第四　速記の假名遣ひ……八
第五　速記文字……一〇
(1)　速記の原字……一〇
(2)　母音と半母音……一一
(3)　父音……一三
(4)　子音……一五
(5)　濁音……一九

目次

(6) 半濁音……一三
(7) 拗音……一三
(8) 反音……二三
(9) 促音……二七
(10) 長音……二九
(11) 疊音……三三
第六 綴り方……三四
第七 略字……三六
第八 數字……四六
第九 數字の綴り方……五九
第十 省略法……六三
第十一 速記術心得……六七
第十二 綴り方例及課題……七三
……七九

自習

速記術

榊原清著

第一 速記の歴史

先づざつと速記の歴史から述べる事と致しませう。速記と云ふものは、西洋では隨分昔から行はれたのであります。世界の大雄辯家と云はれた羅馬のシセロと云ふ人が、略記法と云ふものを考へ出して二人の門人に教へたのが速記の起源だと云ふ事でありますから、西洋で速記を行ふ事になつてから

既に二千年以上になるのであります。

その後速記術は、いろ〳〵の人からいろ〳〵の改良をされる事となりました。其中で最も有名な改良者は英國のビットマンと云ふ人であります。今西洋で行はれて居る速記は、ビットマン式か又はビットマン式に幾分改良を加へたものであります。

そこで、この西洋の速記術を日本の五十音に結付けて、日本速記術を發明した人は誰であるかと云ふと、それは岩手縣の田鎖綱紀と云ふ人であります。頃は明治十五年、いろ〳〵の苦心の結果、日本傍聽筆記法と云ふ名を付けて公にされたのであります。そして「速記術」と云ふ名に改めたのは明治二十三年の春であります。田鎖氏の外にも速記術を研究した人は二三ありまして、新聞や雜誌で公にした事もありますが、矢張り田鎖氏の速記術が一番評判が宜敷かつたのであります

第二　易しくて難しい

速記術と云ふものは非常に便利なものでありますが、一體易しいものか難しいものかと云ふと、易しくて難しいものと

云ふ外はないのであります。なぜ易しくて難しいかと云ふと、第一速記の字が至つて易しい、綴方も至つて易しい、讀み分ける事も亦至つて易しいのであります。併しながら懸板に水を流すやうな演說なり講演なりを、すら〳〵と速記するまでには十分練習を積まねばならないのであります、この練習を積むと云ふ事が中々難しいのであります。最初速記の字だけを覺え込んで、これなら譯もなく誰にでも出來ると思つては大變な間違であります。けれども熱心に練習を積んで掛れば、どんな早い演說でも何の苦もなく愉快に速記する事が出來るのであります。練習の必要な事は速記術ばかりではなく、何を學ぶにも必要でありますが、速記術には殊にこれが必要なのであります。其處で速記術を自習して、一通り速記の出來るやうになりたいと思ふ方は、十分練習をする覺悟で掛らねばなるまいと思ひます。我慢强く度々練習する事の出來ない人は最初から速記を覺えようと思はない方が好いのであります。山の上から麓の景色を眺めようとするには、是非とも山の上まで上らねばなりません。山の上に上るのが厭な人、上るだけの勇氣のない人は麓の景色を眺める事は出來ないのと

同じ事であります。

第三　速記自習の用意

いよ〳〵速記術を知りたい。練習を積んですら〳〵とどんな演説でも書き取つて見たい。苦しくつても山の上に上つて麓の景色を眺めて見たいと思ふお方は、まづ鉛筆と用紙をお揃へなさい。速記術の練習には鉛筆と用紙の外には何にも入らない、鉛筆と用紙だけあれば十分練習が出來るのであります。併し鉛筆は硬くても軟くても不可ません。硬くもなく軟くもないと云ふ、鉛筆を選ばねばなりません。一打二十錢位で買へる月印ならば最も適當でありますが、月印がなければ畫學用の心持ち硬い鉛筆で結構であります。又用紙は普通の半紙か西洋紙でも惡い事はありませんが、質の粗いものは鉛筆の運びがすら〳〵と參りませんし、と云つて餘り滑かなものでは鉛筆が辷り過ぎますから、最も適當な用紙は駿河半紙であらうと思ひます。次に鉛筆の持ち方と、用紙の置き方を説明せねばなりませんが、鉛筆は削つたところから八分乃至一寸位ゐの上部を、母指と食指と中指で寛く握り、用紙は四

十枚乃至六七十枚を眞中で綴つて二つ折りの帳面となし、少し斜に机の上に置いて、左の手指で紙の一方の端を摘み、紙をまくる事の出來るやうに用意するのが必要であります。

第四　速記の假名遣ひ

速記文字を説明する前に、速記の假名遣ひを説明して置きませう。速記術では決して日本古來の假名遣ひの法則や文典を守る必要はないのであります。元來速記術と云ふものは人間の言葉を直寫するのが目的でありますから、人間の發音を其の音の儘に書き取ればそれで目的は遂げる譯になるのであります。勿論速記したものを普通文に書直す時は文典や假名遣ひの法則に從はねばならぬ事は申すまでもありません。例へば、

(一)　イと發音するヒ、キは皆なイと致します。鳥井のトリキはトリイ。舞子のマヒコはマイコ。

(二)　エと發音するヘ、エは皆なエと致します。繪師のエシはエシ。天へ昇るのテンへはテンエ。

(三)　オと發音するヲ、ホは皆なオと致します。尾花のヲバナ

はオバナ。汐干のシホヒはシオヒ。

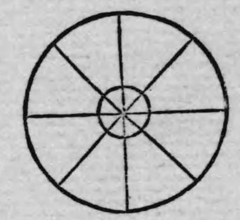
(四) ワと發音するハは皆なワと致します。之はのコレハはコレワ。夜廻りのヨマハリはヨマワリ。

(五) クワ、クヲなどの音は皆なカ、コと致します。會見のクワイケンはカイケン。結果のケツクワはケツか。

第五　速記文字

(1) 速記の原字

速記の原字は次に示す圖の如く、大小二重の環でありまして、横線、縱線、右斜線、左斜線の四線を交叉せしめたものであります。そして左の圖の中の、



(一) 小さい環から母音を取ります。
(二) 大きな環から父音を取ります。
(三) 父母音合して子音を生みます。

上圖の大小環から何うして父母子音を取るかと云ふ事は次に説明します。

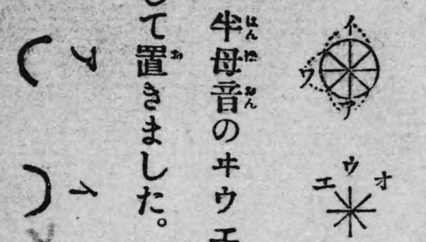
(2) 母音と半母音

母音と云ふものはアイウエオの五字、半母音と云ふものは

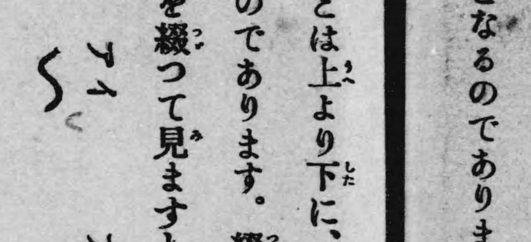
ワキウエヲの五字を云ふのであります。そしてこの母音半母音は小さい環から左に示す圖式のやうに取るのであります。

アは即ち ⌒ イは即ち ⌒
ウは即ち ― エは即ち ＼
オは即ち ／ ワは即ち ⌒

半母音のキウエヲは、イウエオと同樣である事は既に說明して置きました。其處で母音半母音を書き改めて見ますと、

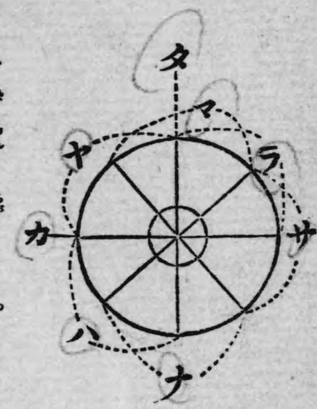


となるのであります。右の內アとイとは左より右に、ウとワとは上より下に、エは左より斜右に、オは右より斜左に書くのであります。綴字は改めて示しますが母音と半母音で一二を綴つて見ますと



(3) 父音

父音と云ふものはカサタナハマヤラの八字を云ふのでありまして、大きな環から左に示す圖式のやうに取るのであります。



カは即ち　サは即ち
タは即ち　ナは即ち
ハは即ち　マは即ち
ヤは即ち　ラは即ち

父母音の違つて居るところは環の大小に從ひ、母音は父音の四分の一、父音は母音の四倍大に書くのであります。で、ウの大きな字はタ、アの大きな字はナ、マの小さい字はイであります。右の内カとナとハとマとは左より右に、サとタとは上より右に、ヤは左の下より右の上に、ラは左の上より右の下へ書くのであります。之を改めて書いて見ますと、

となるのであります。綴り一二を示しますと、

(4) 子音

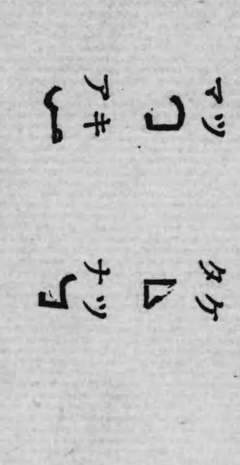
子音と云ふものはカ行のキクケコ、サ行のシスセソのやう

なものであります。子音が父音と母音との爲めに生まれると云ふ事は既に説いて置いた通りでありますが、左の表に依つて明かになるであらうと思ひます。但し表には母音のアだけは省きます。

父＼母	ア	イ	ウ	エ	オ	ヤ	ユ	ヨ	ワ	ヰ	ヱ	ヲ
カ	カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ	クワ	クヰ	クヱ	クヲ
サ	サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ	スワ	スヰ	スヱ	スヲ
タ	タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ	ツワ	ツヰ	ツヱ	ツヲ
ナ	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニャ	ニュ	ニョ	ヌワ	ヌヰ	ヌヱ	ヌヲ
ハ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒャ	ヒュ	ヒョ	フワ	フヰ	フヱ	フヲ
マ	マ	ミ	ム	メ	モ	ミャ	ミュ	ミョ	ムワ	ムヰ	ムヱ	ムヲ
ヤ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ							
ラ	ラ	リ	ル	レ	ロ	リャ	リュ	リョ	ルワ	ルヰ	ルヱ	ルヲ
ワ	ワ	ヰ	ウ	ヱ	ヲ							
ガ	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ	グワ	グヰ	グヱ	グヲ
ザ	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ	ズワ	ズヰ	ズヱ	ズヲ
ダ	ダ	ヂ	ヅ	デ	ド	ヂャ	ヂュ	ヂョ	ヅワ	ヅヰ	ヅヱ	ヅヲ
バ	バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ	ブワ	ブヰ	ブヱ	ブヲ

欠

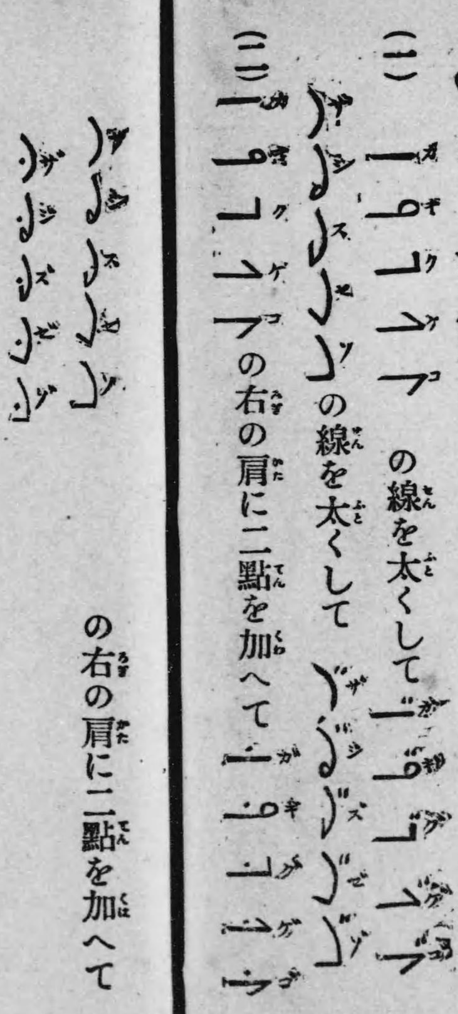
イウエオから順に書いて見たり、又イロハから書いて見たり、アカサタナから書いて見たり、突然ウの字は何う書くかと質問されたら、立ろにウの字が書ける、マの字は何う書くかと質問されたら、立ろにマの字が書けると云ふやうにならねばなりません。綴字の例を二三示しますと、

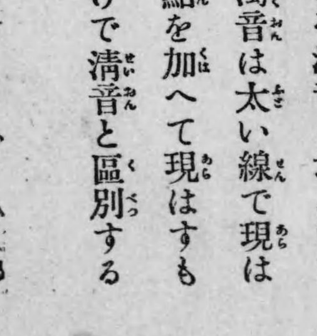


(5) 濁音

欠

濁音と云ふものはニゴル音の事であります。例へばガギグゲゴ、ザジズゼゾのやうな清音でないものを濁音と云ふのであります。從來日本の速記術では、この濁音は太い線で現はすものもあれば、清音假名の右の肩に二點を加へて現はすものもあり、又は一點を線の上に加へたゞけで清音と區別するものもあります。例へば、

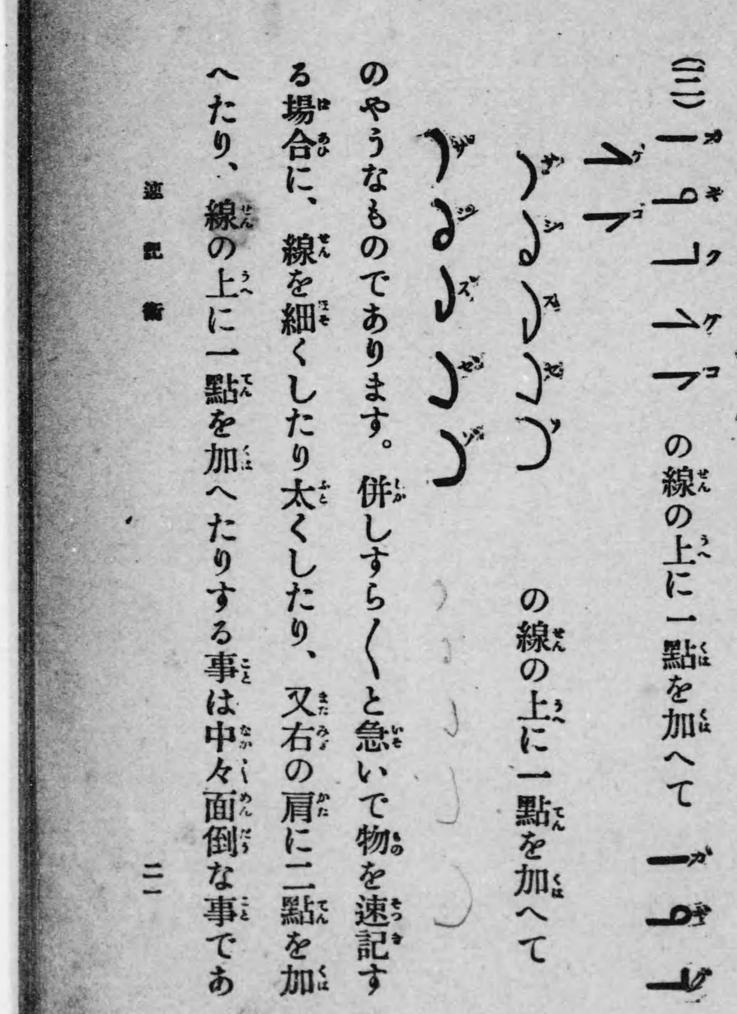
(一)　 

の線を太くして　 

(二)　

の線を太くして　

の右の肩に二點を加へて　



(三)　

の線の上に一點を加へて　

の右の肩に二點を加へて

の線の上に一點を加へて

のやうなものであります。併しすら〳〵と急いで物を速記する場合に、線を細くしたり太くしたり、又右の肩に二點を加へたり、線の上に一點を加へたりする事は中々面倒な事であ

りますから、速記學者の中には清濁音をまるで區別せずに、感で讀ませるやうに教へる人もあります。ソツキカクシヤは速記學者、テツヒンは鐵瓶と云ふやうに讀ませるのであります。專門の速記學者としては線を細くなり太くなり、右の肩に二點を加へるなり、又は一點を加へるなりして清音と區別する必要があるかも知れませんが、專門學者以外の人は面倒臭い事はしないで、感で書き分け讀み分けるやうにする方が好からうと思ひます。

(6) 半濁音

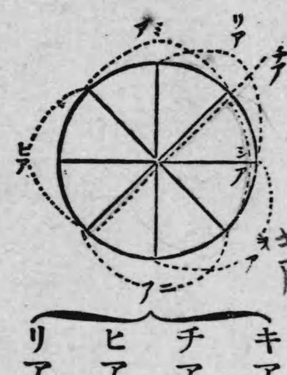
半濁音と云ふものはパピプペポの五文字であります。これは何れの速記學者も一定の文字を書く事となつて居ります。即ち左の通りであります。

(7) 拗音

拗音と云ふものは例へば釋迦のシヤ、休日のキウ、大學のキヨのやうなものであります。國音では二個の假名で組立てゝありますが、速記術では一字の假名にしてあります。尤も拗音にも父音、母音、子音の別がありますから、左圖と左表

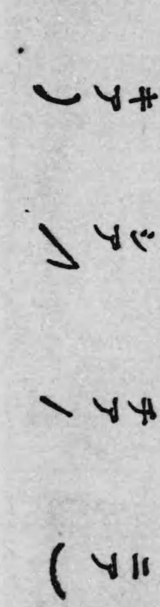
とを御覽なさい。

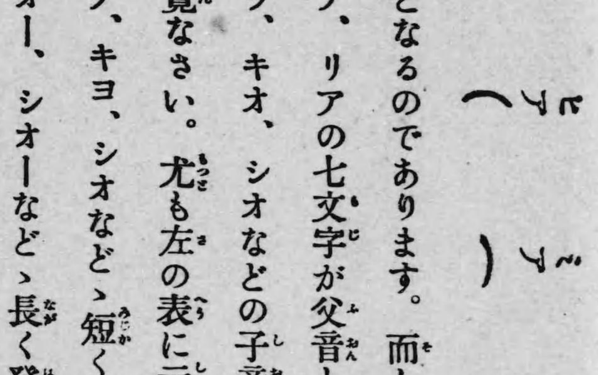
先づ拗音は左の圖から左の如く厚く割出すのであります。



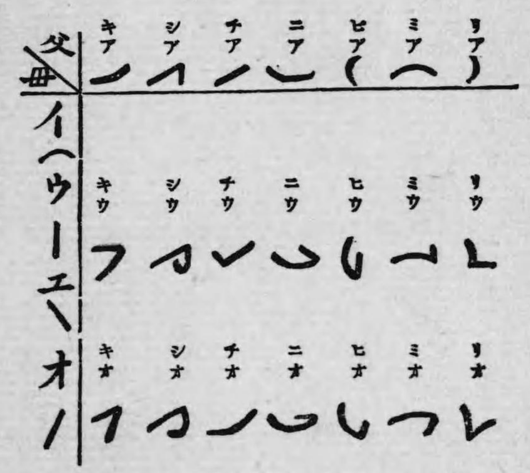
キアは即ち シアは即ち
チアは即ち ニアは即ち
ヒアは即ち ミアは即ち
リアは即ち

之れを書き改めますと、





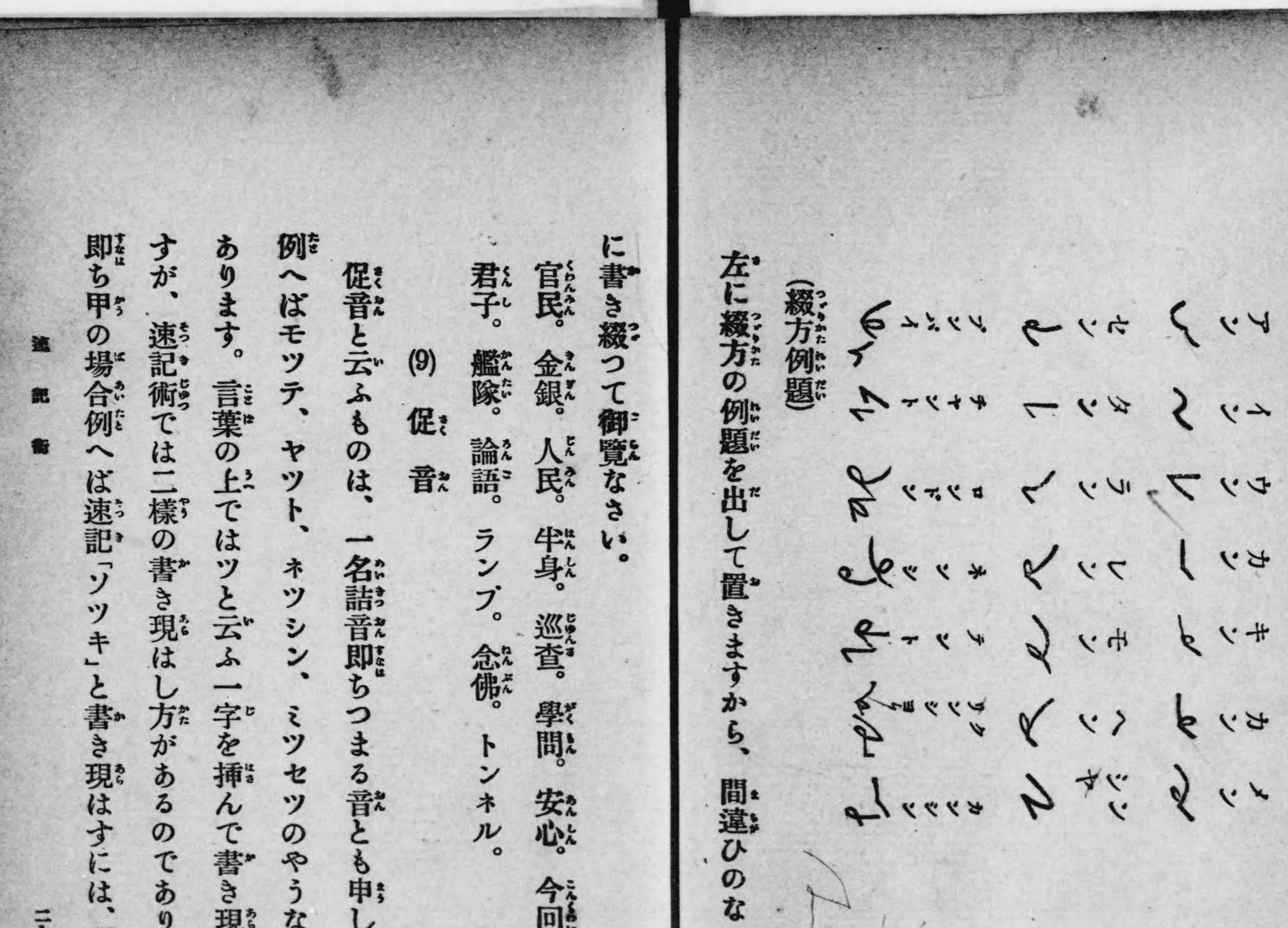
となるのであります。而してこのキア、シア、ニア、ヒア、ミア、リアの七文字が父音となり、イウエオの母音と合してキウ、キオ、シオなどの子音を生むのであります。左の表を御覽なさい。尤も左の表に示した二十一字の拗音は、キア、シア、キヨ、シオなどゝ短く發音するので、キアー、シアー、キオー、シオーなどゝ長く發音するのではありません。長く發音するものは長音として別に說明します。



又拗音の濁音即ちギア、ジアの如きものは普通の濁音のやうに別に區別せずに感で書き分け讀み分けるやうにして結構であります。

(8) 反音

反音と云ふものはハネル音即ち「ん」と云ふ音の事であります。一名鼻音とも申します。んと云ふ反音は一字で獨立は出來ません。カに附いてカンとなるか、テに附いてテンとなるか致しますが、速記術では矢張りんを右の肩に向つて撥ねるやうに文字の尾を撥ねるのであります。例へば左に示すやうなものであります。濁音は假に太い線を以て現はします。



（綴方例題）

左に綴方の例題を出して置きますから、間違ひのないやうに書き綴つて御覽なさい。

官民。金銀。人民。半身。巡査。學問。安心。今回。天下。

君子。艦隊。論語。ランプ。念佛。トンネル。

(9) 促音

促音と云ふものは、一名詰音即ちつまる音とも申しまして、例へばモツテ、ヤツト、ネツシン、ミツセツのやうなものであります。言葉の上ではツと云ふ一字を挿んで書き現はしますが、速記術では二樣の書き現はし方があるのであります。即ち甲の場合例へば速記「ソツキ」と書き現はすには、「ソツキ」

と綴らないで先づ初めに「ソ」の字を書き、次に「キ」の字で以て「ソ」の字の眞中を兩斷するのであります。詰り前字の「ソ」と後字の「キ」と交叉して促音である事を示すのであります。

又乙の場合例へば國家「コツカ」と書き現はすには、「コ」字と「カ」字を交叉させる事が出來ない爲めに、横線のものは横に、縱線のものは縱に並べるのであります。左に二三例を擧げませう。

甲の例

一切	キツサイ	國家	コツカ
オツカ樣	オツカサン	乙の	ツバ
訴へ	ウツタヘ	例	ツバ
幾度	タツトブ	國家	ガツカリ

（綴方例題）

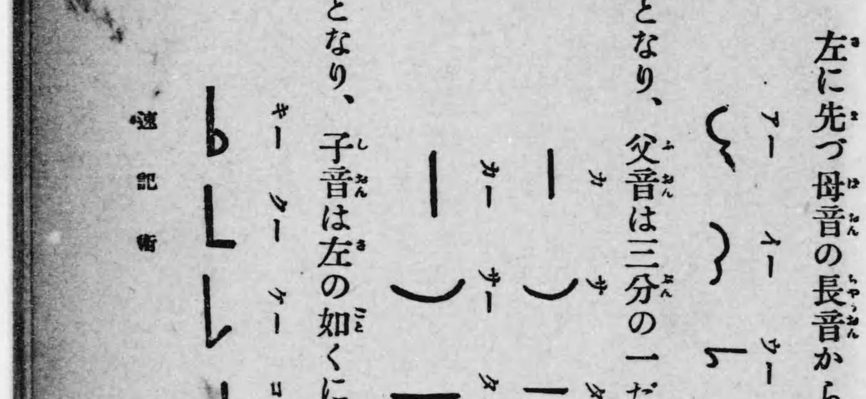
雑誌。一體。チツト。目下。列席。出品。白虎隊。早速。
借金。突進。切手。昨今。落花。眞最中。

(10) 長音

長音と云ふものはアー、イー、カー、チヨー、キヨーなど
ゝ長く引く音の事であります。長音の書方にはいろ〳〵あり
まして一定しませんが、最も簡便な佃式に由りますと、

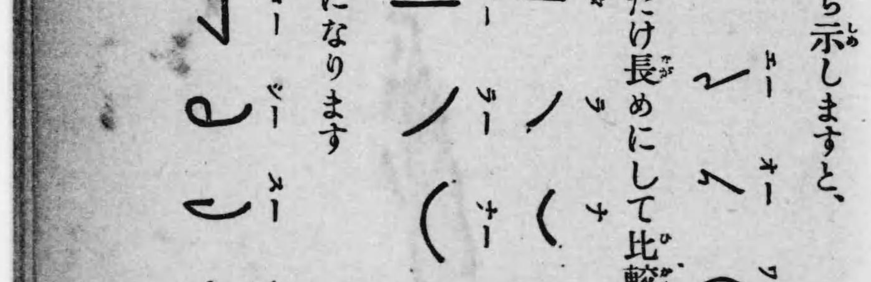
(1) 母音アイウエオワは字の尾をゆする。
(2) 父音カサタナハマヤラは字を三分の一長く書く。
(3) 子音の全部は母音を倍の大きさと長さとにする。

左に先づ母音の長音から示しますと、



となり、父音は三分の一だけ長めにして比較して示しますと、

となり、子音は左の如くになります



チー　ツー　ヂー　ドー　ニー　ヌー　ネー　ノー

ジツー　ジオー　チツー　チオー　ヒツー　ヒオー

（綴方例題）

空氣。交際。要塞。琉球。盲目。貿易。長命。

(11) 疊音

疊音と云ふものは、チヽ、ハヽ、サマ〳〵、ハラ〳〵などのやうに一つ音が重なる場合を云ふのであります。速記術では他の音と疊音とはゆすりを以て區別するのであります。ゆ

するには母音ならば三分の一、父音と子音とは四分の一か五分の一の大きさに書くのであります。又二字以上重なつた時にはゆすりを大きくするのであります。例へば、

ジン　ジン　ヒヽ　ヒヽ

ボヽ　ボヽ　イヽ　イヽ　ツヽ　ツヽ　トヽ　トヽ

ビラズ〳〵　サラモ〳〵

前に説きました長音の母音と疊音の母音は同じ書方ですから其のお積りで。

（綴方例題）

獅子。金銀。よし〳〵。耳。はら〳〵。かち〳〵山。まゝ事。ヒヤ〳〵。辛い〳〵。甘い〳〵。

第六　綴り方

既に速記術の文字符號は大抵説き盡しましたから、次に綴り方の説明に移ります。

欠

略字と云ふものは、普通日常非常に多く用ゐらるゝ言葉や熟語を速記文字で綴るよりも簡易ならしめる爲めに拵へたものであります。動詞や助動詞や形容詞と區別しては面倒ですから、一纏めにして左に掲げる事と致しました。斷つて置きますが左の略字は凡て熊崎式に依つたのであります。最も略字は自分〳〵で拵へても差支えはありませんが、矢張り專門學者の拵へたものを應用するが好いでせう。

デス　デシタ　デシテ

欠

シタ

シタリ

シタ

シタリ

シタル

シタルハ

ヲル

ヲルハ

ヲル

ヲルハ

セシム

ナリ又はナル

タリ又はタル

ヨリ

ガ如シ又ハ如キ

スル

マス

マスル

マシタ

マシタル

マセヌデシタ

シマセヌデシタ

マシタ

シマシタ

マセヌデセウ

シマセヌデセウ

ラレタリ

セラレタリ

ラルハヨリ

セラルハヨリ

ラレマス

セラレマス

ラレマスル

セラレマスル

ラレマシタ

セラレマシタ

ラレマシテ

セラレマシテ

ラレマセウ
セラレマセウ

ラレマスマイ
セラレマスマイ

ラレマセヌ
セラレマセヌ

ラレマセヌデシタ
セラレマセヌデシタ

ラレマセヌデシタ
セラレマセヌデシタ

ラレマセヌデセウ
セラレマセヌデセウ

ウケタマハル

イタス

オモヒビ

オヨナフ

カンガヘ

アラタム

、ゴザル

トイフ

オモフ

ミトム

ナリマス
ナリシ

ナス

アリ又はアル

ノジム

ナリ
ナル

ナラレマス

イフ

ナシ又はナク

モトム

ナラル
ナラル、

ナリマスル

ナラレマスル
ナリマシタ
ナラレマシタ
ナラヌ
ナリマシテ
ナリマセウ
ナラレマセウ
ナラレヌ
ナラレン
ナラレマセヌ
ナラレズ
ナラレザル
ナリマセヌデシタ
トリマセヌ
ナラズ
ナラザル

ナリマセヌデシテ
ナリマセヌデセウ
ナラレマセヌデシタ
ナラレマセヌデシテ
ナラレマセヌデセウ
ナラレネバ
ナラレネバ
ナルガ
ナリテ
ナラレテ
ナラルハガ
ナルモ

ナラルハモ
アルヒハ
アイダ
アラカジメ
イハユル

ナラヌ
アキラカ
アリサマ
イヤシクモ
タバイマ

アダカモ
アラハル
アイカハラズ
トヽヘドモ
オヨソ

オイテ
カハハラズ
ケツシテ
ザクゼツ
スミヤカニ

カナラズ
カニリミ
カクノヱトク
メウニチ
スベカラズ

カナラズシモ
クワシケイ
コンニチ
シカリ
スクナシ

ウナガス　タヽチニ　タチマチ

タチマツル　マコトニ　チツバキ

トリシマリ　トリアツカハ　キクトコロニヨレバ

ナラビニ　ノミナラズ　イカントナレバ

ヒキツバキ　フタヽビ　キガハグバ

ヤヽモスレバ　イワザルヲエズ　ヨロシク

ヨノナカ　ヨロコブ　クレクレ

左に例題を出しますから略字を應用して綴つて御覽なさい。

(1) 私は學問が好きです。

(2) 僕は昨日上京した。

(3) 妹をして洗濯せしめたり。

(4) 君は遊びには行かないでせう。

(5) 毎朝冷水摩擦を行ふ。

(6) 君は必ず成功をして豪い人物になれるでせう。

(7) 相變らず今日も寒い事です。

(8) 再び君と相見るを喜ぶ。

(9) 世の中は三日見ぬ間の櫻かな。

(10) 恰も水の流るゝが如し。

右十題の内略字を應用して一二題綴つてお目に掛けませう。

(8) 再び君と相見るを喜ぶ。

(10) 恰も水の流るゝが如し。

文章を綴る時は、一句づゝ別々に離して綴らねば、複雜になつて、後で讀み分け惡くなります。

第八　數字

數字の一より九までは速記文字の父音を用ゐる人もありま

すが、却つて面倒ですから矢張り「1.2.3.4.5.6.7.8.9.」の亞刺伯亞數字を其儘用ゐた方が好からうと思ひます。又十以上の數字は熊崎式が最も便利でもあり又進歩したものでもありますから、茲には同式を御紹介致しませう。

(1) 十位

(2) 百位

(3) 千位

(4) 萬位

一萬　二萬　三萬　四萬　五萬

(5) 十萬位

十萬　二十萬　三十萬　四十萬　五十萬

(6) 百萬位

百萬　二百萬　三百萬　四百萬　五百萬

(7) 千萬位

千萬　二千萬　三千萬　四千萬　五千萬

(8) 億位

億位は算用數字の下に速記字で「オク」と書く事にしてあります。例へば五億ならば

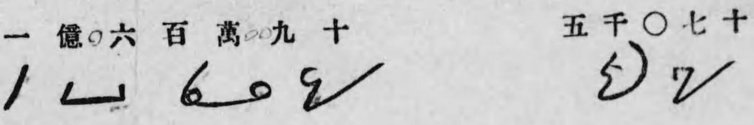
5 ⌊

第九　數字の綴り方

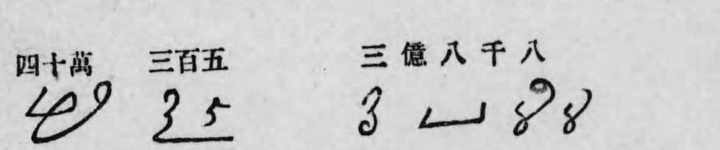
數字の綴り方は至つて簡易でありまして、格別綴り方とし

て心得べきものもありません。

一億六百萬九十　　五千〇七十



四十萬　三百五　　三億八千八



(例題)

(1) 二百七十一萬三百五。

(2) 二十九萬三百十八。

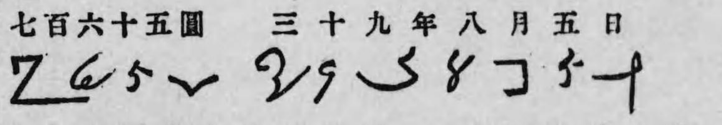
(3) 六億五千三百二十一。

(4) 八千六百五十一萬三千。

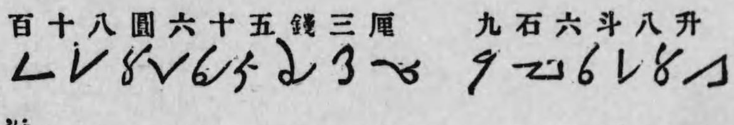
(5) 二萬五千六百八十九。

數字が若し金錢、日時などに關する場合には速記文字で現はすのであります。

七百六十五圓　　三十九年八月五日



百十八圓六十五錢三厘　　九石六斗八升



(例題)

(1) 六百十八圓五十六錢五厘。

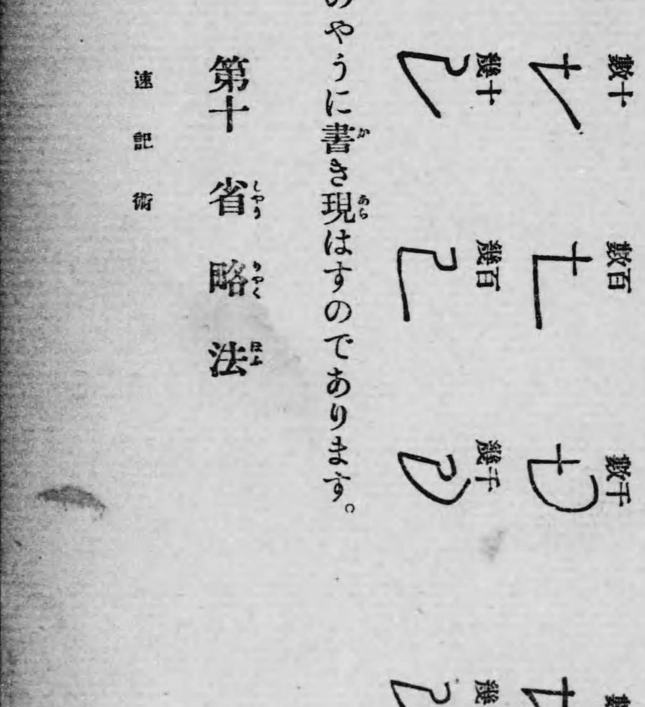
(2) 二十九石六斗八升七合。

(3) 三十二年六月十八日。

(4) 三千五百六十一斤。

(5) 二百九十八里十六町。

若し又數字が二三とか、五六圓とか、八九十錢とか確定數でない場合に、數字を二個以上用ゐねばならぬ時は、數字の下に一點を附して區別するのであります。例へば次のやうに、



又數十、數百、幾十、幾百と云ふ場合には、

のやうに書き現はすのであります。

第十　省略法

省略法は高等速記術とも云はれるものでありまして、實地に應用しますと、實に便利極まるものでありますが、專門速記者以外の人では却つて誤り易い恐れがありますから、態と省く事と致しまして、唯だ名詞と熟語省略法の一二を掲げて置きませう。

名詞を省略するには、例へば演說を速記する場合に、

「乃木大將が殉死をなされました。」

と云ふ一句がありとします。すると「乃木」と云ふ二文字に大將と云ふ二文字を附けなくとも、「乃木」と云ふ二文字だけで乃木大將と云ふ事が分りますから、斯んな場合には省略法を用ゐなくとも宜敷いのでありますが。

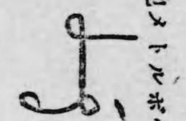
「阿部伯爵と阿部知事が……」

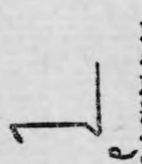
と云ふ一句がありとしますと、阿部の下に伯爵と知事とを書き分けるのは面倒でありますから、伯爵には「ハ」の字知事には「チ」の字を附けて伯爵と知事とを省略するのであります。これは右の肩に記さねばなりません。

同談會事

同談會事

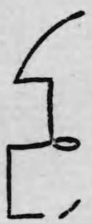
一二其の例を掲げますと、



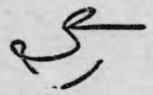


右に掲げたやうに記すのであります。熟語の場合には何うするかと申しますと、例へば福德圓滿と云ふ四文字の如き、天眞爛漫の四文字の如きは、誰れでも知つて居るところの熟語でありますから、「フクトクエンマン」や「テンシンランマン」やとは書かないで、「フクトク」と書いて右の肩に「エ」の字を附けてさへ置けば福德圓滿と云ふ事が知れ、又「テンシン」と書いて右の肩に「ラ」の字を附けて置けば天眞爛漫と云ふ事が知れる筈であります。即ち

(1)

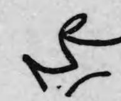


(2)

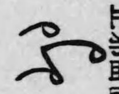


(1)が福德圓滿　(2)が天眞爛漫たる事は一見して忽ち分るのであります。猶ほ一二例を掲げますと、

千山萬岳



正邪曲直



仁義禮智信

士農工商

と云ふやうなものであります。

（例題）

地方裁判所。東京府廳。西園寺侯爵。桂大將。文學美術。

東西南北。忠臣孝子。神社佛閣。

第十一　速記術心得

速記術の文字符號其他の事に就いて、只今まで說いたところを記憶練習なさると、一通りの速記は必ずしも難しい事ではないのであります。卷頭に揭げた文句と聊か重復の文字もありませうが、念のため速記術の心得ともなるべきものを、左に一二記載して置きませう。

第一には速記文字の習字であります。卷頭に於ても說いて置きました通り、速記術は決して難しいものではないのであ

ります。併し演說なり講演なりをすら〳〵と速記するまでには、十分忍耐の覺悟がなくてはならないのであります。曾て某速記學者が明治女學校で速記を隨意科の一つに加へた爲に講師に聘せられた事があります。最初速記を知りたいと思つて稽古に掛つた生徒が八十何人あつたさうであります。ところがその八十何人の生徒は段々減つて、六ケ月目には十人に滿たない數となり、一ケ年辛抱して卒業した者は僅か五六人であつたと云ふ事であります。詰り最初何でもないと思つて掛つて見ると中々面倒臭い。これでは〳〵と一人減り二人減りして遂に五六人になつたものであらうと思はれます。併し最初から辛抱强く遣る氣で掛るなら、中途で廢めるには及ばない事であらうと思ひます。裁縫などゝ違つて速記ばかりは中途で廢めては何の用にも立ちません。

そこで速記文字の習字に就いての心得でありますが、決して最初からすら〳〵書かうとしてはなりません。なるだけ字畫を正しく字體の崩れないやうに注意し、一字々々別々に念を入れて書き習ふ事が必要であります。

第二には綴字の練習であります。最初は母音と母音、母音

と父音の綴り方から始め、次第に各音の混つた綴り方を練習せねばなりません。面倒だからと云つて好い加減に綴り方をしては速記術を覺えた甲斐はないのであります。若し練習が積んで自由に綴る事が出來ましたら、友人から新聞なり雜誌なりを讀んで貰つて速記を試みる。併し早く讀んで貰つても到底速記する事は出來ませんから、初めは成るだけ徐く、だん〳〵早くして、それでも何の苦もなく速記する事が出來るなら立派な一人前の速記者と云はねばなりません。

第三は飜譯の練習であります。飜譯と云ふ事は一度速記文字に書き止めたものを、國文に書き改める事であります。速記する時は十分解つて居た文字が、後で讀み反して國文に飜譯する段になると、中々譯り惡くなるところが出來るものであります。併し其れは全く不注意から生じた事であります。字を正しく書き綴りを正しく綴つて置いたら、決して飜譯の時困る道理はないのであります。尤も字は正しく書き、綴りは正しく綴つて置いても、飜譯する時不眞面目であれば、飛んでもない間違が出來ないものでもありません。ある新聞社の速記者は、

「カンコクヘイシヤゾウエイ」

をば韓國兵舍造營と譯して新聞に掲載しました。ところが其れは官國幣社造營の間違ひであつたので大笑ひとなつたと云ふ事であります。斯んな間違は決して少ない事ではないのでありますから、十分注意に注意を加へて物笑ひにならないやうにせねばなりません。

第四は速記の時の着席心得であります。第一光線を左の方から取る所を撰ぶやうにせねばなりません。さうでなくては手元が暗くて速記する時非常に不便であります。それから今一つは速記用紙大の板か厚紙を用意する事であります。机のない場合に膝の上に載せて速記するのに便利だからであります。

第十二　綴方例及び課題

速記術に關して說明を要すべき事は、大概說明を終りましたから、綴方の例と課題を左に掲げませう。

綴り方例

(鷹) (柿) (紙) (桃)

カー キー ミー モー

ター カー カー モー

(足) (鎌) (瀧) (海) (村)

シー マー キー ミー ラー

アー カー ダー ウー ムー

(山) (草) (町) (筆) (猿)

マー サー チー デー ルー

ヤー ク ー マー フー サー

(子供) (海鼠) (櫻) (寶) (眞田)

モ コ ラ ダ
ド マ カ ナ
レ ク ー ン
コ ナ ー ザ
フ サ タ

(歌) (人) (鬼) (玉) (獨樂)

タ ト ニ マ マ
ー レ オ ー コ
ウ ヒ タ フ

(君) (國) (民) (僕) (友)

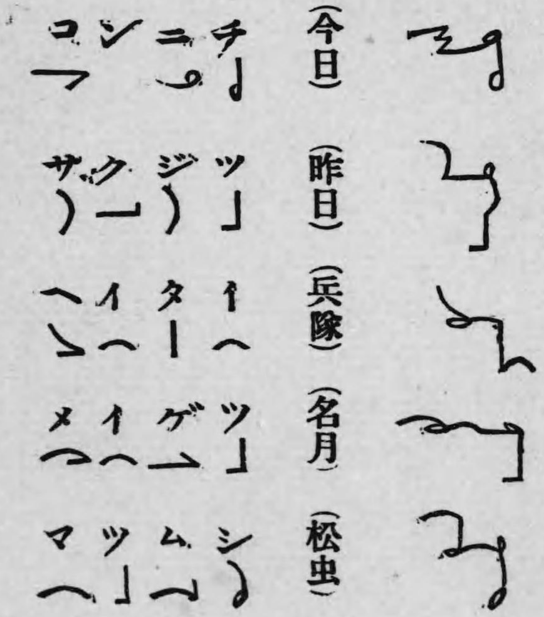
ミ ニ ミ モ
キ ク タ ク
ー ー ー ー ー
ボ モ
ト レ

(河鹿) (着物) (浴衣) (月見) (臘)

カジカ　キモノ　ユカタ　ツキミ　オボロヨ

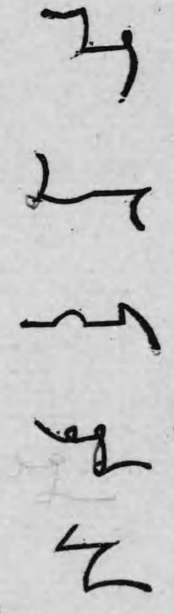
(君が代) (暁) (侍) (鳥の巣) (旅行)

キミガヨ　キツカヒ　サムラヒ　トリノス　リヨコウ



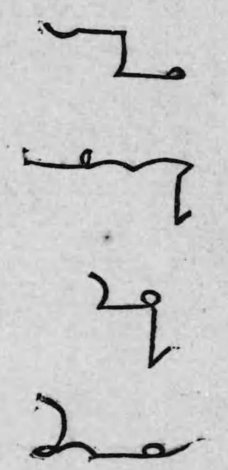
(今日) (昨日) (兵隊) (名月) (松虫)

コンニチ　サクジツ　イヘイ　ターゲツ　メイムシ　マツ

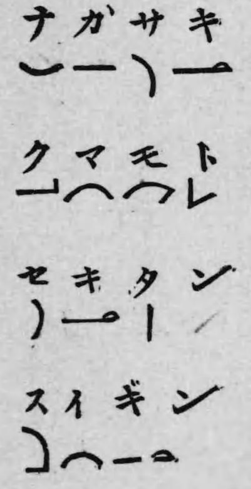


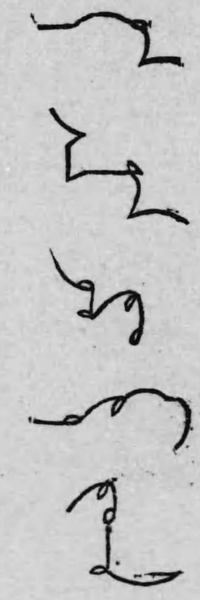
(淺草) (品川) (鎌倉) (福島) (岡山)

サクラ　ハマシ　ヤマカ　クシ　オカ

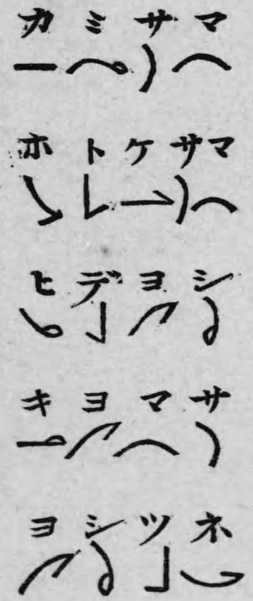


（長崎）（熊本）（石炭）（水銀）





（神様）（佛様）（秀吉）（清正）（義經）



（鶯）（鶏）（山雀）（鶴鴿）

ス　リ　ラ　イ
イ　ト　ガ　レ
グ　レ　マ　キ
ウ　ワ　ヤ　セ
ー　ニ　ノ　ー

（小豆飯）（手拭）

アリガキメバ
「」トル
キミマイ
「」ウ

課題

君が。代は。千代に。八千代に。さゞれ石の。巖と。なりて。苔の。蒸すまで。

○

朝顔に。釣瓶。取られて。貰ひ水。

古池や。蛙。飛びこむ。水の音。

○

磯岩の。四月。鮑と。蝶螺かな。

○

春。過ぎて。夏。來にけらし。白妙の。衣。干すてふ。天の。香具山。

○

立別れ。因幡の。山の。峯に。生ふる。松とし。聞かば。今。歸り來ん。

天津風。雲の。通路。吹き。とぢよ。乙女の。姿。暫し。とゞめん。

○

切ない。時の。神。頼み。

○

前車の。覆るは。後車の。戒。

○

千引の。石は。動かすとも。親には。勝たれず。

○

初物を。食へば。七十五日。長生する。

○

一條の。矢は。折るべし。十條の。矢は。折り難し。

○

武士の。命は。義に。よりて。輕し。

○

蜜柑が。黃色く。なる。時節には。醫者の。顏が。青くなる。

○

鳥影が。障子に。映ると。客が。來る。

○

虎は。死して。皮を。留め。人は。死して。名を。殘す。

○

鷄。寒うして。木に。上り。鴨。寒うして。水に。入る。

○

針を。足の。裏へ。立てると。頭の。上に。昇る。

○

身體髮膚。之を。父母に。受く。敢て。毀傷。せざるは。

孝の。始めなり。

○

我等は。人と。生れきて。一たん。心。定めては。事に。動かず。さそはれず。はげみ。進むに。何事の。など。ならざらん。

○

月の。光は。水の。面に。うつりて。金波。銀波を。躍らせて。居る。

○

笛の。音は。かすかに。遠く。彼方の。森より。響き。出しぬ。

○

見事な。柿を。澤山。お送り。下さいまして。難有う。御座います。

○

其内。參上して。お禮を。申します。

○

毎朝。清き。姿の。朝顔の。花を。愛す。

庭の。藤の。花が。咲いて。風が。吹くたびに。紫の。房が。動いて居る。

○

母は。能く。我等を。愛して。吳れる。

○

雀の。鳴く。聲に。驚かされて。眼を。覺しました。

○

苦あれば。必ず。樂あり。樂あれば。必ず。苦あり。先づ。苦しみて。然る後。樂しむを。賢者とし。先づ。樂しみて。然る後。苦しむを。愚人とす。

○

子供や。犬。などが。喜んで其處。彼處に。戲れて。居る。

○

海。捲き。上ぐる。龍卷も。起らば。起れ。驚かじ。はげしく。敵を。砲擊。せしかば。敵の。艦列。忽ち。亂れ。早くも。戰列を。離るゝ。ものあり。

○

五十鈴川は。流れ。早くして。水。清らかなり。

御垣の。内を。うかゞひ。奉れば。神殿の。御屋根は。萱にて。ふき。棟には。かつを木を。ならべ。兩端に。千木をうちゞがへたり。

○

質素なる。御構へ。却つて。かしこく。忝なし。

○

我等は。一日も。諸先生の。教を。忘れては。ならぬ。

○

秋の。菊は。其の。姿。清らしく。上品である。

親は。子を。愛せよ。子は。親を。いそしめよ。かくてこそ。家もをさまり。國も。をさまる。いしづゑと。なるなれ。

○

立派な。ものが。きつと。役に。立つとは。限りません。

○

忘れば。早い。者も。遲い。者に。負けます。

○

身分を。知らぬ。者は。禍を。受けます。

○

恩人を。恩人と。思はないで。却つて。害を。加へる。者は。人間。仲間にも。隨分。あります。

○

何でも。自分。ひとりで。出來る。ものでは。ありません。

○

粗末な。ものを。數。多く。持つよりも。たとひ。少しでも。物の。良いものを。持つた。方が。勝しです。

○

何でも。よく。事の。見定めが。付かぬ中に、事業を。始めるものでは。ありません。

○

實力が。なくて。過分の。待遇を。望んでも。それは。駄目な。事です。

○

五六匹の。犬が。何處からか。獅々の。皮を。見付けて。來まして。さも。自分達が。强さうに。牙で。散々に。嚙み裂いて。居りますと。狐が通りかゝつて。もし。この。獅子が。生きて。居たら。お前達の。牙より。獅子の。爪の。方

が。余程。強いと云ふ事を。すぐ。見せられるで。あつたらう。

○

泥棒が。ある。富豪の。家に。忍び。込まうと。致しまして。様子を。窺つて、居りますと。飼犬が、見つけて。吠え立てました。そこで。泥棒は。袂から。握飯を。出して。投げて。やりますと。犬は。ます〳〵。聲を。高くしまして。そんな。ものは。食はぬ〳〵。さつきから。臭い。奴だと。思つて。居たが。こんな。賄賂を。出す。位ゐなら。いよいよ。曲者に。違ひない。

○

海豚と。鯨が。一生懸命に。戰つて。居りますと。鰯が。仲裁に。入りましたが。忽ち。鰭で。彈かれて。粉々に。されて。了ひました。

○

崖の、上に。居た。羊が。下を。通る。狼を。見下しまして。狼の。馬鹿野郎と。惡口を。申しました。すると。狼は。笑ひながら。弱虫の。癖に。居所が。少し。好いからつて。

そんなに。威張るない。

○

一頭の。鹿が。病氣に。罹りました。すると。澤山な。獸仲間が。毎日。入れ替り。差替り。見舞に。來て。吳れました。それは。難有いが。其度に。草を。食べに。行く。ものですから。折角。鹿が。病氣は。治つても。今度。食物が。ない爲めに。死なねば。ならぬやうに。なりました。

○

鷄が。餌を。探して。居りますと。塵の中から。貴い。玉

が。一つ。出ました。鷄は。こんな。玉より。一粒の。麥の方が。遙に。利益だ。と申しました。

○

ある。店頭に。空德利が。轉がつて。居りました。其處に。一人の。老翁が。參りまして。德利を。鼻に當てゝ。嗅いで。居りましたが。どうも。好い香だ。空でさへ。この通りだから。何でも。元は。餘程。好い酒が。入つて。居つたのに。違ひないと。獨言を。申しました。

○

掌の。上に。載せた。動物なら。何でも。云ひ當てる。盲人が。ありまして。ある時。狼の。兒を。掌の。上に。載せられ。暫く。考へて。居りましたが。犬の。兒だか。狼の。兒だか。よく。分らないが。何でも。此奴に。羊の。番は。させられぬ。

○

ある。奥山に。一尾の。猿が。二尾の。子を。持つて。居りました。一尾は。大層。可愛いがつて。居りましたが。一尾の。方は。大層。憎んで。居りました。ところが。其の。可愛がつて。居つた。方の。子猿は。病氣に。罹つて。死にましたが。憎んで。居つた。方の。子猿は。健康で。生長ちました。

○

ある人が。一尾の。小魚を。釣り上げ。ました。すると。小魚は。どうぞ。お助け。下さい。お助け。下さるなら。直きに。大きな。魚に。なつて。御料理の。御用を。勤めますと。申しますと。ある人は。イヤ。一旦。お前を。放してからは。赤ん目を。されても。追付けない。

驢馬が。外の。獣から。馬鹿に。されるのを。殘念に。思ひまして。ある日。何處からか。獅子の。皮を。探して、參りまして。それを。冠つて。踊り出しましたから。外の。獣は。驚いて。逃げて。仕舞ひました。驢馬は。圖に。乘つて。一聲。嘶きますと。忽ち。本體が。分つて。外の。獣から。ひどい。目に。逢はされました。

○

蟻が。水に。溺れて。死なうと。して居るのを。木の。上から。見て。居つた。雀が。可愛いさうに。思ひまして。木の、葉を。一枚。落して。やりますと。蟻は。それに。取付いて。命を。助かりました。ところが。今度は。鳥刺が。やつて。來て。その。雀を。覗つて。居りますから。蟻は。突然。鳥刺の。踵に。食ひつきました。すると。鳥刺は。驚いて。竿を。落し。雀は。命を。助かりました。

○

ある時。一尾の。蟹が。棲み。馴れた。海端を。出かけまして。ある。牧場に。這ひ込み。其所を。家として。喜んで居りました。すると。狐が。やつて參りまして。ついぞ。見

慣れぬ。奴だ。食べて。見ようと。ガリ〳〵。食べて。仕舞ひました。

○

鶯が。ある時。鳥の。鳴聲を。聞きまして。大層。面白く思ひ。一生懸命に。その。鳴方を。稽古して。居る内に。肝腎な。自分の。歌は。すつかり。忘れて。仕舞ひました。

自習 速記術 終

大正元年十二月十七日印刷
大正元年十二月二十日發行

（自習速記術）
（定價三十錢）

著者　榊原清
京市神田區松下町一〇

發行者　比企間新造
東京市神田區仲猿樂町四番地

印刷者　佐々木俊一

秀光舍印刷

不許複製

發行所　東京市神田區松下町一〇　振替口座東京一八四番　以文館

蘆谷蘆村先生著

和歌俳句小品文少年作法

かなつき
菊版半切
ポケット入
正價二十錢
郵稅四錢

好評三版

●和歌、俳句、小品文の初學入門の良書なり

本書は十數年の間各種の少年少女雜誌の記者たる蘆村先生が初學者の爲めに和歌、俳句、小品文の作り方を最も分り易く丁寧に說明し、何れも作るときの心得方を初め作例を掲げ更に評釋を加へたれば斯道入門者の無二の好手引き書なり。

●和歌俳句小品文を學ばんと欲する者は見よ

發行 發兌 以文館
東京神田區松下町
振替東京一四八一四

教育勅語書解

繩口勘治郎先生謹述　片山春帆先生謹書

かなつき
菊判頗美本
挿畫十三個
正價金十五錢
郵税金四錢

好評十版

發行

▲附錄高貴御尊影＝菊版二倍寫眞版刷

著者は教育大家として名聲ある人、勅語の兒童用の解說書として適當のものなきを遺憾とし本書を刊行するに至れり本書は教育勅語を解說するに各章を分ち、一々歷史中の重要美談を以て叙述し、稍々難解の個所へは更に挿畫の力を藉りて之を說明し、勅語の御精神を最も平易に興味多く謹述せしものなれば、學生は勿論國民一般の讀物として實に上乘のものなるべし。

發兌　以文館　東京神田區松下町　振替東京四一八一四

御詠十二德書解

東京市一高等女學校教諭　市川源三先生謹著　片山春帆先生謹書

かなつき
菊版頗美本
挿畫十四個
正價二十錢
郵税四錢

最新刊

▲附錄國母陛下御尊影並御眞蹟＝菊版二倍寫眞版刷

本書は國母陛下が我國民の爲め日常の教訓として御下しになつた御詠十二德の御歌の御聖意を最も分り易く解說し、一題毎に御詠についての繪畫を挿入したれば國民一般の讀物として必ず座右に備ふべきものであります。高等二學年の讀本にある御歌は即ち此十二德の御詠を掲げましたものであります。

●此本は市川先生が最も苦心の著で他には未だできてありません

發兌　以文館　東京神田區松下町　振替東京四一八一四

以文館編輯部編

自習 博物採集ト標本ノ作リ方

かなつき
菊版半切
正價二十錢
郵税四錢

最新刊

●はくぶつさいしゅうは興味多き學科である

博物採集は有益にして、樂しみ多し本書は四季其折々植物動物鑛物等を採集し更に之を標本に製作し保存し得る方法を最も平易に書いたものである。諸君が散歩や遠足又は郊外教授を受けるときなどには大切な學科の一である、此活た學問に趣味を持つ諸君の良友書である。

●本書によりて机上に小博物館を作り得らるべし

發兌 以文館
東京神田區松下町
振替東京四一八一四

西川三五郎先生著

自習 綴方百題

かなつき
四六版美本
正價廿五錢
郵税四錢

忽ち三版發行

●ツヅリ方ニ困難スル者ハ本書ニテ自習セヨ

小學校の學科の中で最もむづかしきものは綴方です、それはつゞる事がむづかしいからです、此本は綴方に適切な問題を教科書と連絡を圖つて百題だけ選び文例を掲げ終に種々の文語や熟語等を附し平日練習し得るやうにしてあります此本は最も平易に文章をつゞり得る兒童の自習書にして無二の良書です

●つゞり方を本書によりて練習せば最平易也

發兌 以文館
東京神田區松下町
振替東京四一八一四

藤川淡水先生著　小川千甕先生畫

お伽八犬傳

四六版美本函入
口繪挿繪彩色刷
定價金五十錢
郵税金八錢

再版發行

八犬傳は、曲亭馬琴翁が、二十八年を費して書き上げた有名な小説であります。翁は八犬傳を以て武士の精神、仁侠の氣風、道德の觀念を一般に普及しました。原本は五十二冊の長篇でありますが、今之を教育的のお伽噺に書つづつたら少年少女の讀物として至極結構であらうと僅か此本一冊に書ました之れならば八犬傳が誰にでも能く解つて有益な最も面白き讀物として實に得がたきものであります。

發兌　東京振替貯金東京四一四八一　神田區下松町　以文館

339
163

339
163

終